

# 戰時國民幼稚園

謝感と激感るす對に勇忠(三)

## 倉橋惣三

忠勇に對する感激と感謝とは、日本國民の最大の至情であり、兒孫に傳へずしては居られない心である。それが及ぼす國民教育上の效果の絶大なのは言をまたないが、その效果のためである前に、先づ自ら語らざるを得ない、われら自身の心のほこばしりである。實に忠勇の精神こそ、日本人として誰れでもの心に内藏潜在するまごころであつて、それが、特に強調擴大せられるの機會を得る毎に、之れを我れに感じ、他に感ぜしめずしてはならぬのである。

たゞ、その機會を史上に求むるのが、從來の常であつた。之れ素より貴重なる機會であり、又以て、此の精神の如何に古く日本的なるかを併せ想はしめるものである。しかし、史上の機會は、まごころまでも過去の史實であつて、現在の事實感からは隔てなきを得ぬ。物語なるまごころによつて、史的藝術力を加ふるまごころに實感の切迫性に、時に稀薄ならざるを得ぬ。更に又、その強烈なる史實が感激を與ふるまごころの強きに比して、感謝を感ぜしめるまごころはむつかしいかも知れぬ。少くも未だ國史の全體的把握なく、史實の因果的理解なき幼兒にまごころは、その困難たるを免れぬ。史上の忠勇を語るに當つて、感激に止まらず感謝に至らしめるまごころの必須は何人も用意を怠らないが、その實現は、歴史教授の可能性の上のみ完ふし得るものでもあらう。而して、感謝に至らざる感激だけでは、折角の忠勇が一個の英雄談になつたりすることがある。これに對し、今日は實に、今日は實に、忠勇の感激を觸發せしめられる貴き事實が、目の前にあり、耳に近くあり、史化せられるまごころなく、物語化せられるまごころなく、ありのまごころのいきいきしさに於て、次から次へ與へられてゐるのである。それに對する語るものゝ感激もなまごころしくも又閃々としてゐる。傳へられるものゝ感激も亦なまごころしくも又閃々たらざるを得ぬ。

殊に、今日は實に、一切の忠勇が直接の感謝そのものに他ならぬのである。英雄主義的讚嘆讚美よりも、もつこく深い、しみじみとした感謝こそ、今日の忠勇への實感である。それは、幼兒に對しても、そのまごころに傳はらずしてはやまぬ實感である。即ち、忠勇に對する日本國民としての一番眞實な實感が、幼き心ながらも實感せしめられてゐるのである。

今日は實に、何んたる大きな國民教育が生きて行はれてゐる時であらう。史的理解なきに訴へ難い幼兒教育にまごころも、眞に活きた國民教育の出來てゐる時である。假りにも吾等の怠りによつて、此の機會を活かし足らないまごころがあつては濟まない。